

朝鮮半島南部の鏡と倭韓の交渉

Mirrors of the Southern Korean Peninsula
and Negotiations between Wa (Japan) and Korea

上野祥史

UENO Yoshifumi

はじめに

①鏡と朝鮮半島一出土鏡をめぐる認識の背景

②朝鮮半島南部出土鏡の概要と系譜

③中国鏡の流入プロセス

④倭鏡の入手プロセス

⑤鏡を介した倭の対韓交渉

おわりに

【論文要旨】

器物を媒介とした政治関係は、分与者の視点で語られる傾向が強い。器物の価値を自明とする意識を相対化し、分与者および受領者が価値を認識する場やプロセスに注目した検討が求められる。朝鮮半島南部の出土鏡は、その問題をもっとも先鋭化させ鮮明にする資料である。

本論では、古墳時代と並行する三国時代において、朝鮮半島南部が保有した鏡をもとに、その入手経緯を整理し、倭王権が鏡分与を通じて企図した秩序とその構造を検討することで、倭韓の交渉の実態を描出しようと試みた。

まず、朝鮮半島南部出土鏡の概要を整理し、中国での鏡の保有状況と日本列島での鏡の保有状況を対照して、中国鏡と倭鏡の流入プロセスを検討した。中国鏡の流入は、倭韓が対中国交渉を共有し、相互に関係をもちつつも独立した交渉を進め個別に入手したものとして理解することを提案した。倭鏡では、王権からの直接分与か二次流通を介した間接分与かを、価値の認識という視点で検討した。間接分与でも王権が意図した秩序は機能すること、日本列島内部でも間接分与がみえることから、倭王権が意図した秩序は、直接分与に限定しない柔軟な、拡大の可能性を内包する秩序であることを示した。朝鮮半島南部の倭鏡は、北部九州を介した間接分与（二次流通）が想定できることを指摘した。

倭韓の交渉の実態を詳述するとともに、鏡を媒介とした秩序が、絶対基準を強く意識しすぎることを、分与者と受領者の相互承認を強調しすぎることを改めて指摘し、第三者の認識を可能にする装置としての意義も考える必要があること、朝鮮半島南部の帯金式甲冑や鏡にはそうした機能が期待されたことを示した。

【キーワード】 朝鮮半島南部、鏡の保有、中国鏡、倭鏡、価値の認識、流入経緯

はじめに

国家形成期には、象徴性を帯びた器物が有力首長間に流通し、政治的関係を表象する機能を担った。古墳時代の鏡もその一つである。器物を媒介とした政治関係は、分与者の視点で語られる傾向が強い。それは、各地の有力者を序列化する装置であるという器物の性格を強く反映している。しかし、情報を集積して後世から俯瞰する我々は、無意識に器物の価値を自明のものとしてその関係を理解していないだろうか。器物の価値を認識する場やプロセスがあつてこそ、分与者の意図は器物を通じて表現される。絶えず新たな器物が導入される古墳時代にあつて、分与者と受領者はどのようにして器物の価値を認識し、認識させたのであろうか。この視点が置き去りにされているように思える。鏡の保有が寡少な朝鮮半島南部で出土する鏡は、その問題をより鮮明にする資料である。

本論は、古墳時代と並行する三国時代において、朝鮮半島南部が保有した鏡をもとに、その入手経緯を整理し、倭王権が鏡分与を通じて意図した秩序と、倭韓の交渉の実態とを描出しようと試みるものである。

①……………鏡と朝鮮半島—出土鏡をめぐる認識の背景

鏡は、日本列島での国家形成期において重要な役割を果たした器物である。主要な副葬品であり、古墳時代の首長間関係、王権の政治秩序を論究する対象として注目される。中国鏡の入手は、日本列島の各地域社会を束ねた政治体の対外交渉を象徴し、日本列島内での中国鏡の流通は、その政治体の中核たる王権と地域首長との関係を反映したものと認識される。日本列島で製作した倭鏡は、専ら王権と地域首長との関係を反映する器物である。鏡は、古墳時代社会において、対外交渉と内部統合という2つの次元で機能したが、その検討は内部統合に偏る傾向をもつ。中国王朝から入手した経緯が、鏡に自明の価値を付与し、鏡の分与が政治的権威を生成したという理解を一般的なものとなし、統合の形態、分与の実態に関心が集中したのである〔福永 2005a, 辻田 2007, 下垣 2011 など〕。

日本列島と一衣帯水を隔てた朝鮮半島は、中国と日本列島の間位置しており、両世界の関係・交流を仲介する性格をもつ。しかし、朝鮮半島南部で出土する鏡は数が非常に少なく、中国鏡の模倣生産もきわめて低調であった。朝鮮三国時代の鏡は、専ら中国や日本列島との対外交渉を反映する器物として、認識し評価することになる〔上野 2004, 下垣 2011, 辻田 2018〕。三国時代は、日本列島の古墳時代と同じく、社会統合が進み王権が成立・確立する時期にあたり、各地の社会は外部より受け入れた器物を利用して、首長間関係を構築し社会統合を進めた。主たる器物は冠や帯金具、耳飾や馬具であり、外来器物を受容するだけでなく、各地で独自の形態も創り出された。鏡はこれらと性格が異なり、朝鮮半島南部では外来器物であり続け、内部統合を象徴する存在ではなかった。国家形成という社会統合のプロセスにあつて、鏡が果たした役割は日韓両世界で同じではない。鏡を対象とした研究が、古墳時代研究では蓄積があるのに対して、三国時代研究では希薄であるという非対称性は、社会と器物との結びつきの違いを反映しているのである。

ところが、朝鮮半島南部では、出土する鏡の数が増加しつつあり、鏡に対する認識は多様になりつつある。中国との関係を積極的に評価する視点や、内部統合において鏡が一定の機能を果たした可能性が意識されている [李 2009]。朝鮮半島南部では鏡が寡少であり、対外関係を読み解くことはできても、内部統合を担う器物として積極的に評価することは難しい、と反駁するのは容易い。しかし、そこには鏡の流通や鏡を媒介とした社会秩序を考える上で重要な示唆が含まれており、傾聴すべき論点が潜在しているように思える。鏡の社会的機能を改めて検討すべき時機が到来しているといえよう。

朝鮮半島南部の中国鏡である三国西晋鏡や南北朝鏡（同型鏡）に対して、中国より直接入手したと理解する傾向も強まりつつある。しかし、中国鏡であることは、中国から流入したことと同義ではない。日本列島は多量の中国鏡を保有し、秩序の構築と維持に鏡を組み込んだ社会があり、古墳時代社会も朝鮮半島南部へ鏡を送り出した候補地である。朝鮮半島南部は、3世紀から6世紀にかけて、中国鏡と倭鏡を保有したのであり、中国鏡と倭鏡を含めて鏡の保有状況を中韓日で比較することが、朝鮮半島南部で保有した鏡の流入プロセスを検討するには必要である。

鏡は朝鮮半島南部で寡少なため、中国由来でも日本列島由来でも、三国時代社会の検討にさほど大きな影響は及ぼさない。しかし、日本列島からの流入を評価する場合、倭鏡のみでとらえるのと、中国鏡と倭鏡でとらえるのとでは、三国時代社会の交渉実態を復元するうえで大きな違いを生じることになる。鏡の流入プロセスを検討するには、同じ系譜に連なる文物との対照や、副葬品組合せにおける鏡と他の器物との関係を検討することも必要である。鏡がどのような関係性・脈絡において各地の社会で取り扱われているかが、そこには反映されるからである。

また、日本列島から流入した鏡に対しては、社会・文化の様相が異なる三国時代社会において鏡を媒介とした秩序が機能したのか、を問う必要もあるであろう。古墳時代には、倭鏡が首長間の序列をあらわす器物として機能した [下垣 2011・2018, 辻田 2007 など]。倭鏡は倭王権の秩序を可視化する装置であるため、朝鮮半島の倭鏡出土地域も王権の秩序が及ぶ範囲に含まれることになる。しかし、それを積極的に肯定する意見は少ない。政治秩序を体現する性格が強い要素であるほど、海峡を跨ぐ倭系要素を一連でとらえる議論は先鋭的になる。全南地域の前方後円墳に対する議論がそれを象徴している [朴 2007, 高田 2014, 山本 2018]。朝鮮半島での倭系要素を日本列島での脈略と別次元でとらえれば、ある空間において統合の機能を果たす器物が、その紐帯の外では統合の機能を喪失し、交渉・交流をあらわす記念物や象徴物に転じたとみることもなる。それは矛盾を調和した整合的な理解のようにみえるが、鏡の流通を一元的とみる日本列島内部での論理に矛盾を生むことになる [上野 2004]。分与者か受領者かという評価の視点が異なることで、紐帯の線引きが変わることになる。確かに、国家形成の議論では統合＝紐帯がより注視され、形成後の古代国家がもつ領域・紐帯観念を前提として、形成期にそれを遡及させる傾向は強い。器物を媒介とした関係が、分与者主体の議論に偏重する所以でもある。しかし、古墳時代・三国時代における紐帯・統合は単一的・排他的なものではなく、各政治体が意図する紐帯が併存し競合する状況にあることはつとに指摘されるとおりである [高田 2014]。様々な紐帯が重層的に交錯した状況こそ、国家形成期の実情ではないだろうか。朝鮮半島南部出土鏡は、倭王権を起点とした鏡の分配にも論点を提起することとなり、鏡を媒介とした古墳時代社会の政治秩序の理解にも影響を与えるのである。

朝鮮半島南部における鏡を媒介とした秩序の是非を問うことは、鏡の価値を自明の前提とした議論の本質に迫るものでもある。そもそも、鏡を媒介とした王権の秩序がいかなるものか。器物の価値という視点でそれを問い直すべきことを、朝鮮半島南部の出土鏡は提起している。保有する器物の価値をどのようにして認識したのか、という視点で器物の社会的意義を論究することは少ない。自明の価値に拠るのではなく、器物の価値を認識するプロセスに基づいて、器物を媒介とした秩序の構築や維持を理解する必要がある。自明の価値を前提とした外来器物の評価は、鏡に限るものではない。境界を越えた「外来器物」には宿命的な命題であるともいえよう。

希少な外来器物であることにおいて、朝鮮半島南部の出土鏡は、日本列島の帯金具や胡籐、耳飾、冠などの金工品と同じである。日本列島でも、5世紀以降朝鮮半島南部に由来する耳飾や帯金具あるいは馬具などの装身具が数多く流入してくる。これらは希少性だけに価値の根源があるのではなく、対外交渉における一定の意義、着装による紐帯・関係性の表象—器物を媒介とした秩序への参画—など、社会機能的な価値も想定される [上野 2014]。朝鮮半島南部の鏡は、日本列島の外来器物にも還元しうる論点を内包しているのである。

その際、朝鮮半島南部の外来器物と日本列島の外来器物は同質ではないとする、潜在的な意識にも注意が必要である。古墳時代社会は三国時代社会から、冶金技術・金属加工技術・窯業生産・馬匹生産など、新たな技術や文物を受容したのであり、いずれも既存の技術・生産体系からは自生しない先進的技術・文物であった。後の日本列島社会で広く受容・普及してゆく基礎技術であり、その起点としてこの時期の外来要素の需要はより強調されることになる。ために、技術・文物の送り手である三国時代社会を先進的にとらえ、受け手である古墳時代社会を後進的にとらえる前提が潜在することになる。それは、倭王権の政治秩序を反映した鏡の受容を疑問視させる背景でもある。

三国時代社会は、古墳時代社会からさまざまな文物を受け入れた。倭系文物と形容するこれらの器物には、武装を含めた装身具などの象徴器物と、土師器・須恵器など実用器物とがある。後者は、日本列島から移動した人間集団の活動を反映しており、後進的世界が技術・情報・文物を受容する動きの一環として容易に受け入れられる。しかし、政治的意図を反映する象徴器物が、後進的世界から先進的世界へと移動することを容認する論者は少ない。交渉・交流をめぐる日韓両世界の位相が、倭王権の政治秩序と三国時代社会との関係を理解する場においても影響しているのである。鏡にも、帯金式甲冑に対する評価と同じ背景は見いだせる [上野・高田編 2016]。武寧王陵出土鏡を倭からの分与されたものではないとみる意見にも、6世紀以後の倭と百済の政治関係が投影されている。日韓の社会状況という大枠の前提が、朝鮮半島南部出土の倭系文物に対する理解に大きく作用しているのではないだろうか。倭韓関係の非対称性を相対化して、倭系文物から倭韓交渉の実態を論ずる必要を指摘しておきたい。

朝鮮半島南部の出土鏡をめぐる認識は、ひとり鏡だけの問題ではない。他の外来器物にも適応が可能な論点を提起するものでもある。本論では、倭韓の相互交渉を理解するうえで、倭の関与を反映する器物でありながら、朝鮮半島南部では寡少であるがゆえに、積極的な議論が展開することの少ない鏡を取り上げ、その授受をめぐる認識について検討を深めることにしたい。

②……………朝鮮半島南部出土鏡の概要と系譜

まず、朝鮮半島南部から出土した鏡の概要を整理してみよう。三国時代以前に、朝鮮半島北部は中国王朝の郡県支配のもとにあった。楽浪漢墓は地域社会を運営した漢人の奥津城であり、同漢墓では王朝領域内の他の郡県と同じように、鏡が普遍的に存在した。姿見・化粧具という実用品として、あるいは辟邪を祈念した呪具として、社会の広範な階層が鏡を保有したのである。一方、朝鮮半島南部の三韓では、楽浪郡域との交渉を反映して中国鏡が流入した。昌原茶戸里1号墓や慶州朝陽洞38号墓などの有力墓では、漢より入手した鏡を他の象徴的器物とともに副葬した。朝鮮半島南部で希少な鏡は保有階層に限られ、漢との交渉を反映する貴重財であった〔高久2000・2002〕。

中国鏡の朝鮮半島南部への流入はその後にも継続するが、三国時代社会が成立する3世紀に至るまで、その流れは一様ではない。漢・楽浪郡との交渉の疎密を反映して、流入する鏡の質や量が変化したのである。3世紀以前に共通しているのは、中国鏡の流入が連続的ではなく一過的であること、その模倣も一過的に過ぎないことである〔上野2015c〕。

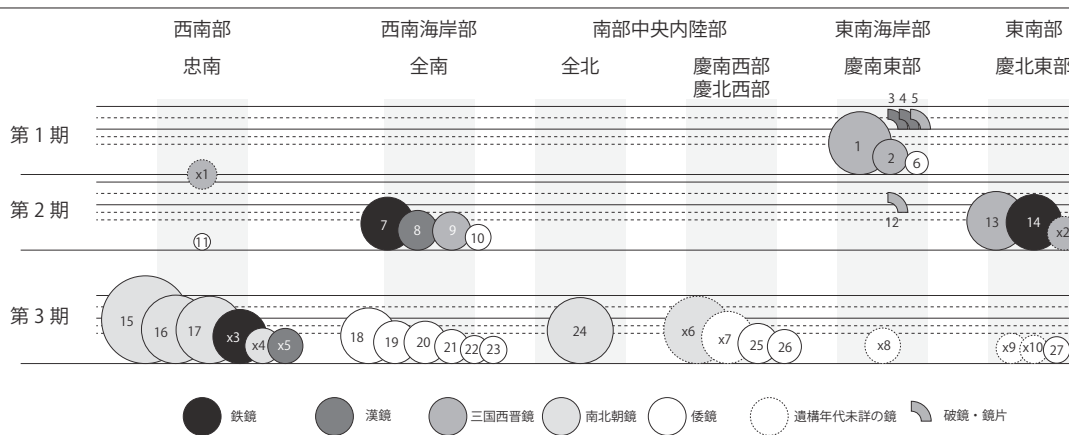
3世紀以後も、朝鮮半島南部が保有した鏡の数は少なく、外部から流入する器物であった。3世紀以後の朝鮮半島南部には、中国鏡と倭鏡が流入する。中国鏡と倭鏡の判別は、形態的特徴をもとにしたものであるが、中国鏡が中国から流入したとは限らない。古墳時代社会も多量の中国鏡を保有し、中国鏡を送り出した可能性があるからである。中国、朝鮮半島、日本列島の東アジア各地が保有した鏡を整理し、その比較を通じて朝鮮半島南部への流入プロセスを検討する必要があるだろう。そのためには、先ず3世紀から6世紀にかけて、朝鮮半島南部が保有した鏡の様相を整理することが必要なのである。

三国時代の遺跡から出土した鏡は、時期ごとに分布域が異なり、なおかつ出土する鏡の系譜も変化し、出土鏡の面径も同じではない。以下では、3世紀から6世紀にかけて朝鮮半島南部が保有した鏡を、時期ごとに系譜・分布域・面径という指標に沿って整理することにした。大きくは4世紀と、5世紀前半を前後する時期、6世紀前半を前後する時期に分けることが可能であり、それぞれの時期を第1期、第2期、第3期と呼び論を進めることにする。

なお、本論では、副葬現象に基づいて社会が保有した鏡を整理する。ある時間相において流入（入手）した鏡と副葬した鏡が同じであるとは限らないが、副葬した鏡はその時期に保有したことが確実な鏡である。入手した時期は不明でも、副葬直前に保有していたことは確かであり、特定時期に保有した傾向を抽出することに支障はない〔上野2018〕。最低限の保有を実証する副葬鏡をもとに、各期の保有を整理してみたい。その全容は図1で模式的に示したとおりである。図と対照して説明することにした。

第1期の鏡 4世紀の遺構から出土した鏡には、慶南金海大成洞古墳群や同良洞里古墳群、昌原三東洞甕棺墓の出土鏡が該当する。3世紀の遺構から出土した資料はない。

大成洞古墳群では、23号墳と70号墳で鏡を副葬しており、2号墳でも盗掘坑から鏡片が出土している〔大成洞古墳群博物館2015〕。23号墳出土鏡（図1-1）は、紋様構成や個々の図像表現が漢の方格規矩四神鏡と共通するが、鈕座の12乳から三国西晋鏡の可能性を指摘ができる鏡である。70



S=1/10

図1 朝鮮半島南部出土鏡の変遷模式図

号墳出土鏡(図1-3)は、漢鏡の内行花文鏡の鏡片であり、2号墳出土鏡(図1-4・5)は、いずれも浮彫式獸帯鏡片である。2号墳出土鏡の一つは漢鏡であるが、いま一つは図像の表現が大きく、漢鏡やそれを模倣した古墳時代倭鏡に類例がない、位置づけの難しい鏡である。鏡片は、弥生時代後期に盛行した鏡の存在形態である⁽²⁾。大成洞古墳群では倭系文物や中国系文物との共伴が顕著であり、鏡の副葬古墳では倭系文物が共伴しており、70号墳では西晋系の金銅装帯金具などが共伴した。

良洞里441号墳では、三国西晋鏡の模倣方格規矩鏡が出土している(図1-2)。方格とT字形のみの規矩表現をもつ退化型式である。魏の紀年銘方格規矩鏡から型式変遷を追うことが可能な鏡であり、形態的には三国西晋鏡の特徴を備える。しかし、中国での出土がなく、日本列島での出土が集中するため、中国鏡とすることに懐疑的な見解もある。良洞里441号墳出土鏡は、福岡県東真方1号墳出土鏡と同型鏡であることでも注目されている。良洞里古墳群では数多くの倭系文物を保有しているが、441号墳での共伴はみえない。

昌原三東洞18号甕棺墓では、内行花文鏡系倭鏡⁽³⁾が出土した(図1-6)。六花内行花紋を特徴とする古墳時代倭鏡の内行花紋鏡であり、古墳時代前期に製作した倭鏡である。同墓には倭系文物がみえないが、2号石棺墓では銅鏃と共伴している。

4世紀後半までの時期に朝鮮半島南部が保有した鏡は、三国西晋鏡と、弥生時代の鏡(漢鏡片)と古墳時代倭鏡(第1期倭鏡)の3種であった。金海と昌原という、いずれも東南部沿岸地域からの出土であることを特徴としており、倭系文物を保有した集団が鏡を保有していた傾向がみえる。

第2期の鏡 4世紀末葉から5世紀中葉を含む、5世紀前半を前後する時期の遺構から出土した鏡には、全南新安ベノルリ古墳出土鏡(図1-7)、同高興野幕古墳出土鏡(図1-8)、同高興雁洞古墳出土鏡(図1-9,10)と、忠南天安花城里B2号墓出土鏡(図1-11)、慶南金海大成洞14号墳出土鏡(図1-12)、慶北慶州皇南大塚出土鏡(図1-13,14)がある。

ベノルリ古墳では、鉄鏡が三角板鋌留衝角付冑・三角板革綴短甲と共伴して出土しており、野幕古墳では、三国西晋鏡の模倣双頭龍紋鏡と素紋鏡が三角板革綴衝角付冑・三角板革綴短甲と共伴して出土した。雁洞古墳では、漢鏡の蝙蝠座内行花文鏡が革製を含む眉庇付冑と長方板革綴短甲や、

金銅製冠帽・飾履などと共伴して出土した〔全南大学校博物館ほか2015, 東新大学校博物館2015, 国立羅州文化財研究所2015〕。

天安花城里B2号墓では、旋回状の櫛歯紋を二重に巡らせた紋様をもつ鏡が出土している。弥生時代倭鏡との関係が指摘されている。

大成洞14号墳では、分割・穿孔・研磨を施した内行花紋鏡片が出土した。弥生時代後期に九州北部を中心に流通し、一部は古墳時代まで遺存した。鏡片形態であることは、第1期の70号墳や2号墳と共通している。

皇南大塚では、南墳から三国西晋鏡の模倣方格規矩鏡が出土しており、北墳から鉄鏡が出土している。同墓には数多くの外来器物が副葬されているが、陶磁器や金属製品など中国系・高句麗系の器物であり、倭系文物はみえていない。

この時期には、慶南以外の地域で鏡を保有することが特徴である。なかでも、西南部海岸地域と東南部内陸部での保有という二相は特徴的である。西南部海岸地域では倭の帯金式甲冑と共伴することに特徴があり、慶州では倭系文物と共伴しないことに特徴がある。両者は対照的であり、鏡を保有する朝鮮半島南部の様相は一様ではない。

第3期の鏡 5世紀末葉以後の、6世紀前半を前後する時期の遺構から出土した鏡には、忠南公州武寧王陵出土鏡(図1-15~17)、全南潭陽斎月里古墳(図1-19・21)、同光州双岩洞古墳(図1-20)、同海南造山古墳(図-23)、同萬義塚1号墳(図1-18)、全北南原斗洛里32号墳(図1-24)、慶南山清生草9号墳(図1-26)、慶北高霊45号墳(図1-25)、慶北金鈴塚(図1-27)などがある〔東新大学校博物館2015, 全北大学校博物館ほか2015〕。

忠南公州武寧王陵では、王及び王妃の保有鏡として、踏返模倣を特徴とする南北朝鏡が3面出土している。同墓はさまざまな南朝系の文物を副葬することで著名であるが、倭系文物は乏しく、木棺材のコウヤマキを挙げうるに過ぎない。

全南地域では、前方後円墳の築造と並行する5世紀末葉から6世紀前葉にかけての時期に、鏡を副葬している。いずれも旋回式獣像鏡や珠紋鏡であり、古墳時代中期後葉以後に流通する古墳時代倭鏡である。前方後円墳や九州系の横穴式石室など、遺物だけではなく埋葬施設に倭系の要素が反映される地域であり、倭鏡の流入もそうした倭系要素の流入の一端として理解される。

朝鮮半島南部の中央内陸地帯では、南原で南北朝鏡の浮彫式獣帯鏡を保有し、高霊・山清で旋回式獣像鏡や珠紋鏡など、古墳時代倭鏡(第3期倭鏡)を保有していた。山清生草古墳群には、須恵器の副葬があり、9号墳に珠紋鏡を副葬していた。この地域は、横穴式石室の埋葬施設に北部九州との関係も指摘される地域でもある〔朴天秀2004・2007, 高田2014〕。

東南部では、慶北慶州で珠紋鏡系倭鏡を保有した。古墳時代倭鏡であり、全南地域や中央内陸部の珠紋鏡と共通した鏡である。

遺構の年代が明確な資料に限定すれば、この時期には、忠南と全北では南北朝鏡を保有し、全南・慶南・慶北の諸地域では古墳時代倭鏡を、ことに中期後葉以後の第3期倭鏡を保有していた。忠南と全北で倭鏡を保有していないことは大きな特徴である。西南部から東南部に至るより広い範囲で鏡を保有しており、朝鮮半島南部ではこれまでにない鏡保有のひろがりが見える。そのなかで、地域により保有する鏡の系譜の違いが明瞭であった。

その他の諸資料 出土遺構や共伴遺物から時期が明確な墳墓・墓葬出土資料のほかに、忠南瑞山機池里21号墓出土の模倣細線式獣像鏡(図1-x1)、同公州公山城出土の雲気禽獸紋鏡(図1-x4)、同扶余下黄里出土の方格規矩鏡(図1-x5)、同扶余花枝山ラ地区8号建物遺構出土の鉄鏡(図1-x3)、慶北慶州皇南里出土の捩紋鏡(図1-x9)、同校洞出土の模倣双頭龍紋鏡(図1-x2)、慶山林堂出土の珠紋鏡(図1-10)、慶南出土の浮彫式獸帶鏡(図1-x6)と慶南晋州出土の旋回式獣像鏡(図1-x7)、慶南梁山の乳脚紋鏡(図1-x8)がある。

機池里21号墓出土の模倣細線式獣像鏡は、奈良県新沢312号墳出土鏡や、江蘇南京江寧谷里晋墓出土鏡〔南京市博物館ほか2008、車崎2008〕などと共通する三国西晋鏡である。第1期もしくは第2期の保有を想定することになる(図2)。

公山城出土の雲気禽獸紋鏡は、紋様構成が漢鏡の雲気禽獸紋鏡と同じであるが、模糊とした表面形状を特徴としており、踏返模倣を特徴とする南北朝鏡である。下黄里出土の方格規矩鏡は、漢鏡の方格規矩鏡と同じであり、鑄上りが精良な鏡であり、漢鏡だと認識する。花枝山ラ地区8号建物遺構出土鏡は、鉄鏡であり朝鮮半島南部出土鏡の傾向に照らせば、第2期の流入を想定してもよい。いずれも、公州・扶余という5世紀後半以降の遺跡であり、第3期に保有した鏡であることは確実な資料である。

皇南里出土の捩紋鏡は、古墳時代倭鏡(第1期倭鏡)である。5世紀末から6世紀初頭の積石木槨墓から出土したとの情報に基づけば、第3期の保有鏡ということになる。

校洞出土と伝える模倣双頭龍紋鏡は、三国西晋鏡である。同種の鏡を第2期の野幕古墳に副葬し



図2 中韓日で共有した三国西晋鏡(S=2/3)

1. 江蘇南京江寧谷里晋墓出土 2. 奈良県新沢312号墳出土 3. 忠南瑞山機池里21号墓出土

ており、同時期の皇南大塚では鏡種が異なるものの三国西晋鏡を副葬していることから、校洞出土の模倣双頭龍紋鏡はこの時期の副葬鏡であると理解しておきたい。

慶南出土と伝える浮彫式獸帯鏡は、日本列島でも同型鏡が出土している南北朝鏡である [川西 2004, 国立文化財研究所 2005]。南北朝鏡なので、この時期に保有した鏡であることは確かである。ただ、その詳細な地域は不明であり、ここでは時期の想定をすることと定める。

慶山出土と伝える珠紋鏡、慶南晋州出土の旋回式獸像鏡と慶南梁山出土の乳脚紋鏡は、ともに第 3 期倭鏡であり、古墳時代中期後半以後の 5 世紀後葉以後に製作した鏡であることから、第 3 期に保有した鏡であることは確実である。

これらの資料を加えても、時期別に各地が保有した鏡の傾向は変わることなく、その傾向をより鮮明にするものでもあった。

鏡の系譜と保有地の変化 朝鮮半島南部の各地が保有した鏡を時期別に概観してきたが、各期別に保有する鏡には特徴がみえた (図 1)。第 1 期に保有する鏡は、漢鏡片と三国西晋鏡と第 1 期倭鏡であった。第 2 期に保有した鏡は、漢鏡と三国西晋鏡、漢鏡片と鉄鏡であった。第 3 期に保有した鏡は、南北朝鏡と漢鏡、第 1 期倭鏡・第 3 期倭鏡であった。中国鏡の視点で見れば、第 2 期に鉄鏡が登場すること、第 3 期に南北朝が登場することを画期としている。倭鏡の視点で見れば、第 1 期と第 2 期はほぼ皆無の状態であり、第 3 期に多量の倭鏡を保有したことになる。加えて、鏡の保有地域は、慶南東部から全南地域と慶北東部へ、そして南部一帯へと保有地域が展開する。第 1 期から第 3 期まで安定して保有を継続する地域がみえないことは、各時期の入手が断続的であったことを示している (図 1)。

面径の形態比較 朝鮮半島南部の出土鏡を面径で比較すると、いくつかの区分が見だせる。20cm を超える一群と、18cm を前後する一群、15cm を前後する一群、10~12cm の一群、8~10cm の一群、8cm 以下の一群である (図 3)。それぞれの面径を、大型鏡、中型鏡 A、中型鏡 B、小型鏡 A、小型鏡 B、小型鏡 C と表現して、各地で保有する鏡の特徴を面径という視点で整理してみよう (図 1)。なお、図 1 ではこの規格を反映して示している。

第 1 期の慶南東部では、中型鏡 A (三国西晋鏡) と小型鏡 B (三国西晋鏡)・小型鏡 C (第 1 期倭鏡) を保有した。

第 2 期の全南地域では、中型鏡 B (鉄鏡) と小型鏡 A (漢鏡・三国西晋鏡) と小型鏡 C (系譜の不明な素紋鏡—おそらくは倭鏡と推測する—) を保有していた。忠南地域では、小型鏡 C (弥生倭鏡) を保有する。慶北東部では、中型鏡 B (鉄鏡・三国西晋鏡) を保有しており、小型鏡 B (三国西晋鏡) を保有していた可能性もある。全南地域も慶北東部も類似した鏡種を保有しており、保有

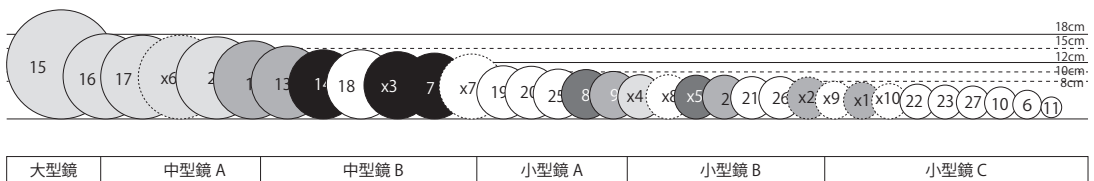


図 3 朝鮮半島南部出土鏡の面径分布と区分

する鏡の面径も近似した様子がみえる。

第3期の保有は多様であり、忠南では大型鏡と中型鏡A・Bと小型鏡Bを保有している。いずれも中国鏡であり、南北朝鏡と鉄鏡と漢鏡であった。全北では中型鏡B（南北朝鏡）を保有し、全南は中型鏡Bと各種小型鏡を保有した。全南の鏡はいずれも第3期倭鏡である。慶南西部・慶北西部では、全南と同じ中型鏡Bと小型鏡A・B（いずれも第3期倭鏡）を保有した。慶南東部は小型鏡B（第3期倭鏡）を保有し、慶北東部は小型鏡C（第3期倭鏡）を保有した。

この時期には、南北朝鏡が大型鏡と中型鏡A、第3期倭鏡の旋回式獣像鏡が中型鏡Bと小型鏡A、第3期倭鏡の乳脚紋鏡や珠紋鏡が小型鏡B・Cという具合に、図像・紋様による鏡種の違いと面径の違いがほぼ対応する様子が見出せる。鏡種の違いは、各地が保有する鏡の面径の差でもあった。地域を越えて共通する鏡の序列を見出すことができる。面径と鏡種であらわした序列に照らせば、忠南がより上位に位置づけられ、全北がそれに次ぎ、全南と慶南西部が中位に位置づけられ、慶南東部と慶北が最も下位に位置づけられる。この時期の朝鮮半島南部では鏡保有が不均等であり、西高東低の傾向は面径の序列にも数量にも認めることができる。こうした保有の傾向をふまえれば、慶南出土の南北朝鏡は慶南西部に由来するものである可能性は高い。

③……………中国鏡の流入プロセス

図像・紋様による形態的特徴に基づいて鏡の系譜を整理し、朝鮮半島南部の各地が保有した鏡の様相を整理した。中国鏡は、製作地が中国であることを保証するものではない。南北朝鏡は踏返模倣を特徴とするが、その特徴をもつ同型鏡群は、絶大多数が日本列島より出土しており、製作技術の系譜は南北朝鏡にあっても〔車崎2002b, 上野2007, 岡村2011, 辻田2013・2014a・2015a・2018〕、中国での出土事例を欠くため、冷静に見れば南北朝鏡と断定するには些か躊躇する面もある。同型鏡群の流通は、三角縁神獣鏡や三国西晋鏡の模倣方格規矩鏡と類似した状況にある〔上野2018〕。それゆえ、本論では製作地や流入故地をひとまず措いて、保有する鏡の実態を整理したのである。ここでは、中国および日本列島で3世紀から6世紀に保有した鏡と比較することにより、中国鏡の朝鮮半島南部への流入のプロセスについて考えることにしたい。

中国での保有 三国時代以降、漢鏡の模倣生産が継続し、隋唐時代にまで及んだ〔車崎2002ab〕。3世紀の三国西晋期には図像配置の崩れた創作模倣鏡を、5・6世紀の南北朝期には漢鏡の図像を転用して一部に改変を加えた踏返模倣鏡を生産した〔上野2007〕。3世紀以後の中国では、同時代に生産した鏡だけではなく、古い鏡である漢鏡や、青銅鏡とは素材の異なる鉄鏡を墓に副葬したのである〔上野2013b〕。古い漢鏡を副葬したことと漢鏡を模倣したことは、ともに3世紀以後の中国に一定数の漢鏡が存在したことを反映している。三国西晋鏡の模倣双頭龍紋鏡や模倣方格規矩鏡は、西晋墓での副葬が多く、その後の副葬は寡少となる。模倣双頭龍紋鏡や模倣細線式獣帯鏡は、遼寧北票喇嘛洞前燕墓や陝西咸陽前秦墓でも出土しており〔遼寧省文物考古研究所ほか2004, 咸陽市文物考古研究所2006〕、4世紀の中国東北部は三国西晋鏡を保有していた。模倣双頭龍紋鏡や模倣方格規矩鏡は華北の鏡であり、その流通範囲も華北を中心としており、華南に至ることは少ない。華北東半から中国東北部にかけて、三国西晋鏡と漢鏡を保有していた。

なお、鉄鏡は後漢代より墓に副葬しており、王侯をはじめとする社会上位階層が保有した〔全洪 1994, 近藤 2003〕。三国時代以降南北朝にかけて鉄鏡の副葬は継続しており、周辺地域においても 5 世紀初葉の遼寧北票北燕馮素弗墓や 4 世紀後葉の吉林省輯安県麻線溝 2100 号墓の高句麗王陵からも出土している〔遼寧省博物館編 2015, 吉林省文物考古研究所ほか編 2004〕。相対的に優位な鏡である鉄鏡を王朝周辺領域の東北アジアでも 5 世紀を前後する時期に保有していた。

南北朝期の墓、ことに南朝の墓は盗掘の被害が著しく、損壊を受けていない南朝墓は皆無の状況にある。遺存する副葬品も限られ、遺存した鏡の数も少ない。南北朝期の墓に副葬した鏡には、同時代に生産した南北朝鏡（踏返模倣鏡）がみえるものの、鉄鏡や漢鏡など古鏡が一定数を占めていた〔上野 2013b〕。漢鏡の副葬は、三国西晋期と同じく、模倣鏡の対象として漢鏡が存在したことと関係するものであり、5・6 世紀の中国においても一定の漢鏡が存在したことを示す。なお、漢鏡に改変を加えていない踏返模倣鏡の場合、漢鏡と南北朝鏡を弁別することは困難であり、漢鏡とした資料には同時代の南北朝鏡が含まれる可能性が潜んでいる。3・4 世紀の創作模倣鏡はほぼ皆無であり、より古い漢鏡とそれを模倣した同時代の鏡を保有するのが 5・6 世紀の様相であった。鉄鏡も保有するが、この時期には銅鏡に対する優位性がみえない。後漢から継続した三国両晋期の鉄鏡の性格はそこに見いだせないのである。

華南も華北もともに、漢鏡とその模倣鏡である南北朝鏡を保有したのが、5・6 世紀の銅鏡の様相であった。

日本列島での保有 日本列島では弥生時代中期後葉から中国鏡の流入が始まり、断続的であるが古墳時代後期に至るまで中国鏡の流入が継続した。多くの論者が指摘するように、魏晋への遣使と南朝宋への遣使は、中国鏡が流入する政治的契機として認識される〔小林 1966, 川西 2004, 福永 2005a, 辻田 2007・2018, 岸本 2010・2013, 下垣 2011, 上野 2013ab など〕。3 世紀以降の状況を簡素に表現すれば、3 世紀と 5 世紀に中国鏡が流入し、4 世紀と 6 世紀に中国鏡の流入が停滞した、という理解である。3 世紀に流入したのが三国西晋鏡であり、5 世紀に流入したのが南北朝鏡である。

三国西晋鏡の模倣方格規矩鏡は、前期前葉から副葬が始まり、製作段階を反映して副葬が進行した。方格と T 字形の規矩のみに表現を限定した、型式変化の進んだ模倣方格規矩鏡は、前期後葉から中期中葉にかけて副葬が継続した〔松浦 1994, 森下 1998〕。岡山県金蔵山古墳、佐賀県横田下古墳、栃木県桑 57 号墳などを挙げうる。しかし、模倣方格規矩鏡でも、岐阜県龍門寺 1 号墳や三重県おじょか古墳などでは、比較的丁寧な表現をもつ鏡を中期古墳に副葬しており、鏡の新古が古墳の新古と一致しない例もある。

三国西晋鏡の模倣双頭龍紋鏡は、前期後葉から中期中葉にかけて副葬が継続する。佐賀県谷口古墳や山口県赤妻古墳、岡山県随庵古墳などを挙げうる。その傾向は、退化型式の模倣方格規矩鏡と類似している。また、これらと同じ製作の特徴をもつ三国西晋鏡の模倣内行花文鏡も、兵庫県茶すり山古墳や福井県向山 1 号墳のように、中期中葉前後に副葬する傾向がある。図像表現の特徴から製作時期が下るとみた三国西晋鏡の退化型式は、前期後葉から中期中葉にかけて副葬が集中する（図 4）。帯金式甲冑と共伴する事例も少なくないことも注目される〔上野 2018〕。

鉄鏡は日本列島で寡少であり、3 世紀から 6 世紀に至るまで鉄鏡の副葬は数例過ぎない。その中で、14.5 cm の鉄鏡を副葬した大阪府百舌鳥大塚山古墳の事例は、皇南大塚やベノルリ古墳とほぼ同時

期に、形態を同じくする鉄鏡を保有する事例として注目される〔上野 2004〕。

同型鏡を指標とする南北朝鏡は、5世紀後葉から6世紀中葉にかけて副葬が集中する。中期末葉あるいは後期初葉とする TK23・47 型式期から後期前半の MT15・TK10 型式期に副葬が集中している。その後も副葬は継続しており、6世紀後葉まで保有は継続したのである〔川西 2004, 上野 2015a, 辻田 2015b〕。ただ、後期に副葬した中国鏡は南北朝鏡に限られるわけではなく、三角縁神獸鏡など長期保有を経た鏡も若干存在していた。そこには、愛媛県東宮山古墳や島根県岡田山1号墳など漢鏡を副葬する事例も含まれている。これらは、5・6世紀の中国に南北朝鏡と併存した漢鏡が、南北朝鏡とともに流入した可能性が考えられる。繰り返しになるが、漢鏡に改変を加えていない踏返模倣鏡は漢鏡と区別するのが困難なのである。

朝鮮半島南部への中国鏡の流入 中国鏡は中国と日本列島での保有が認められることから、両地が朝鮮半島南部への流入元の候補地である。第1期と第2期の模倣方格規矩鏡や模倣双頭龍紋鏡は、中国華北から東北部にかけて3・4世紀に保有しており、日本列島では3世紀から5世紀にかけて保有していた。第2期の鉄鏡は、中国王朝領域（華北・華南）や中国東北部で保有しており、日本列島でも5世紀前半に保有していた。同じ中国鏡でも、日本列島での鉄鏡の保有は銅鏡に比べて圧倒的に少ない。第3期の南北朝鏡は、中国王朝領域（華北・華南）でも日本列島でも保有しており、南北朝鏡とともに漢鏡を保有することも共通していた。朝鮮半島南部が保有する中国鏡の状況は、同時期の日本列島と極めて近い状況にある。中国での出土の乏しい模倣方格規矩鏡（三国西晋鏡）や同型鏡群（南北朝鏡）の様相が同じであることは、中国鏡の保有が倭韓でほぼ同調することを示す。

次に、それぞれ個別の事例に即して、共伴する中国系文物や倭系文物との比較から、中国鏡の流入プロセスを整理してみたい。

第1期の慶南東部について、大成洞古墳群は、中国東北地方と日本列島の双方の外来要素をもつ墓として早くから注目されてきた。大成洞古墳群では、銅鍔や、金銅装帯金具など中国王朝領域や中国東北地方に由来する文物があり、中国との対外交渉が強く意識されている。23号墳出土鏡は中日双方からの流入を想定でき、共伴遺物においても鏡を双方の可能性が想定できる〔上野 2004, 李 2009〕。2号墳と70号墳から出土した破鏡・鏡片は、弥生時代の北部九州に由来する鏡である。破鏡は弥生時代から保有を継続して古墳に副葬されたものがあり、福岡県老司古墳出土鏡のように古墳時代に北部九州で加工された事例もあるため〔辻田 2007ab〕、北部九州との関係を反映して倭から流入したものと理解すべきである。良洞里 441号墳出土鏡は、退化型式の模倣方格規矩鏡が中国で出土していないことから、倭での保有と連動させた理解が必要である〔上野 2004〕。だが、この時期の三国西晋鏡は、倭系文物とも中国系文物とも共伴するため、破鏡以外は中国鏡を特定の系譜（流入元）に関係させて理解するのは困難である。

第2期は、鉄鏡と模倣双頭龍紋鏡と漢鏡を副葬する時期である。倭韓で保有した鏡の状況は共通するが、全南と慶北では共伴遺物との関係に相反した状況がみえた。

慶北東部では、倭系文物を欠くため、倭からの流入を想定すれば、鏡のみ単独で流入した状況を考えねばならない〔上野 2004, 辻田 2018〕。模倣方格規矩鏡や鉄鏡は4・5世紀の中国東北地方（三燕・高句麗）が保有していることから、同地から他の金工品とともに流入したと理解するのが、副葬品組成と整合する。新羅は5世紀前半に高句麗の影響を強く受けており、中国東北地方から入手し

たものと考えておくのが整合的ではないだろうか。

全南では、いずれも帯金式甲冑と共伴しており、倭系文物や倭系の埋葬施設をもつ墓での副葬である。中国や中国東北部に由来する文物は共伴しないため、いずれも倭から流入した鏡だと認識する。雁洞古墳では倭系武装具の他に、百済系の飾履などが共伴している。この時期の百済の古墳では陶磁器など中国系文物（東晋南朝の文物）を副葬しているが、冠や飾履など百済系文物と鏡が共伴した事例はなく、鏡を百済系文物とすることはできない。そのため倭から流入したと認識することになる。

第3期は、忠南と全北で南北朝を保有した。いずれも、倭系文物との共伴は希薄であった。同時期の倭鏡が、倭系文物と密接であるのとは対照的である。中国からの入手と、日本列島からの入手を想定した場合が想定できる。

武寧王陵は南朝の要素を色濃く反映しており、他の百済の諸古墳にも埋葬施設や陶磁器などの中国系要素はみえている。王と特定の階層で中国系文物を共有する現象は、5世紀以前の百済の墳墓にもみえている。しかし、鏡は陶磁器のように、百済で分有される器物ではない。6世紀の忠清道地域では、武寧王のみが南北鏡を保有しており、他の墓葬に分有されることはない。中国からの入手を想定するのであれば、極めて限定的な特殊な存在として、鏡は機能したことになる。それは、墓誌や鎮墓獣と同じ性格をもつ。また、斗洛里32号墳出土の南北朝鏡を中国からの入手とすれば、直接入手は困難で、百済を介した入手を想定することになる。全北南原の一被葬者に対して、百済（忠清道地域）では王に限定的な鏡が分与され、極めて異例の特異な扱いということなる。当墳で百済系の金銅製飾履が出土していることは、それと符合する一面を示すことになるのだろう。

一方、同型鏡の保有という点では、日本列島からの流入を考えることが整合的である。同型鏡の分布は、倭王権中枢の所在した近畿地方に集中する他は、東西の両極—九州と東国—に数多く見えることを特徴としている。忠南・全北の南北朝鏡は、その同型鏡が九州南部に保有が多く、こうした西極の様相として理解しても整合的である [川西 2004, 辻田 2012c, 上野 2013a]。

中国から入手した中国鏡を日韓で分有する現象 日本列島での保有状況と類似することが、中国鏡が倭から韓へと流入したと想定させる最大の理由である。この傾向は、第3期の南北朝鏡に顕著であった。消費パターンの類似性が、倭韓の保有を同一視させ、生産地よりも最大の消費地である倭からの流入を想定させるのである。しかし、すべての中国鏡が倭系文物と連動するわけではなかった。第2期の慶北東部、第3期の忠南では、倭系文物が希薄であり、鏡を倭系文物とみなければ、倭系文物は皆無という状況でもあった。

中国と朝鮮半島南部、日本列島が保有する鏡の多寡は、各期を通じて同じ傾向を示している。遡ってみれば、3世紀以前の原三国時代（三韓時代）とも状況は類似している。鏡の保有に、中国・楽浪との地理関係が反映されていないため、3世紀以前には、すべての中国鏡は中国から三韓へ、三韓から倭へという、経路を経るのではなく、中国から三韓へという流通と、中国から倭へという流通が独立して存在したのである [上野 2015c]。すべての鏡が三韓を経由して、倭に到来したとみるのは、あまりにも非現実的である。漢から三韓へ、漢から倭へという個別の流通は、交渉経路の独立性を意味するのではなく、航路・交渉手段を共有しつつも各地が享受する器物が異なったことを示すのである。

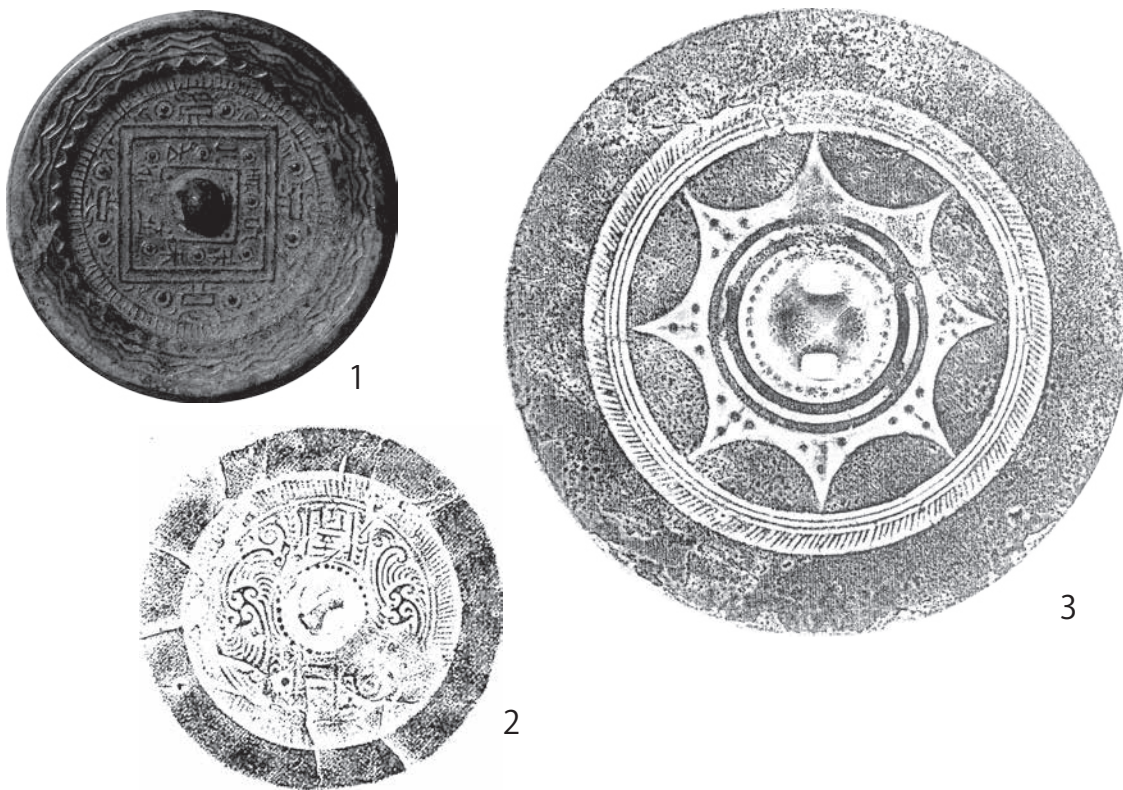


図4 古墳時代中期中葉前後に副葬した三国西晋鏡 (S = 1/2)

1. 熊本県繁根木古墳(伝左山古墳出土) 2. 岡山県隋庵古墳出土 3. 兵庫県茶すり山古墳出土

ここで、第2期の全南地域に改めて注目してみたい。倭系文物との結びつきが強く、中国系文物を欠く状況は、倭から鏡の分与を受けたことを確実視させる。模倣双頭龍紋鏡の保有は倭での傾向とも一致している(図4)。この時期の全南の倭系文物に対しては、倭の対外交渉の展開と連動して島嶼部の被葬者との連携が図られたとする意見が一般的である[国立羅州文化財研究所2014、上野・高田編2016]。倭と関わりのない、自主的な活動でこれらの鏡を入手したとは考えられず、沿岸航路を倭と共有する中での入手ととらえるのが妥当である。倭が朝鮮半島西南部海岸の北を目指した活動において、連携した島嶼部の被葬者に、その交渉・交易で入手した鏡を分与したもの、という理解をすることになる。こうした状況は、原三国(3世紀以前、本論の第1期以前)の鏡の保有状況と似た性格をもつ。

それでは、倭は模倣双頭龍紋鏡などを何処より入手したのか。鏡の入手を中国との関係だけで理解するのは不可能である。倭では模倣双頭龍紋鏡の副葬が5世紀を前後して盛行するため、この時期に入手した諸鏡を分与したと推測する[上野2018]。もし、鏡の製作年代に即して3世紀の三国西晋期に入手したと考えれば、倭王権は入手した一群の鏡を分与することなくこの時期まで保有し続けた、という理解が必要になる。この時期に倭が中国から入手したと考えるのが妥当であり[川西1988、東1990・1992]、その一部が朝鮮半島南部にも流入したと考えておきたい。

当時の国際環境や政治交渉の動向から、4世紀に中国から入手したことに否定的な意見は多い。

しかし、日本列島内での長期保有を強要するよりも、中国鏡の入手を中国に求める方が論理に無理がない。三国西晋鏡を保有した中国もしくは東北部に直接アクセスすることは難しく、倭と中国との交渉は朝鮮半島の中北部での中継が必要となるため、直接的には楽浪・帯方故地を入手先として想定しておきたい。それは、瑞山機池里 21 号墓出土鏡と類似する三国西晋鏡が、西晋墓と倭の古墳で 4 世紀に副葬していることも、こうした中国と朝鮮半島と日本列島との関係性をより明示するものとして理解することが可能になる（図 3）。島嶼部の被葬者と連携した交通路の先に、百済を意識することは多いが、楽浪・帯方故地こそ意識される目的地であることを、これらの鏡は示唆していると考えられる。

ならば、第 2 期に慶北東部と全南地域が同種の鏡を保有したことに對しても、整合的な説明が可能になる。楽浪・帯方故地まで含めた中国東北地方という入手先が同じであることに起因した現象との理解が可能になるからである。

3 世紀以前や、第 2 期の全南の状況に対する理解を他にも援用することは可能であり、倭韓が対中国交渉を個別に展開する中で、独自に入手したことを想定することは荒唐無稽ではない。第 1 期の慶南の三国西晋鏡や、第 3 期の南北朝鏡についても、倭韓が交渉先を共有し、交渉手段を共有する中で生じた分有の結果とみることもできるのではないだろうか。

第 3 期に倭で同型鏡が数多く存在することに対しては、百済と倭が独立して対中国交渉を進めたが、交渉先がおなじであったため、結果として同型鏡を共有したという理解になる。南北朝鏡には、南朝—倭と南朝—百済という二つの経路が存在したことを想定することになる。そもそも朝鮮半島事情を前提として、その経路をより優位に進めるために中国へ遣使したことを考えれば、入手の経緯が同じであっても奇異ではない。

対外交渉にせよ、内部統合にせよ、器物を媒介とした関係に政治性をより強く反映させようとするが故に、器物の系譜・流入故地をめぐる議論が先鋭的になるのである。一つの器物を単系的に理解しようとする思考こそ、相対化されるべきではないだろうか。日本列島で保有した中国鏡（三国西晋鏡・南北朝鏡）のすべてが朝鮮半島南部を中継したと考える要もなく、朝鮮半島南部の中国鏡（三国西晋鏡・南北朝鏡）のすべてを日本列島との関係で考える要もないのではないことを指摘したい。

④……………倭鏡の入手プロセス

倭鏡は、日本列島から朝鮮半島南部へと流入したことが確かなものである。これらの鏡に対しては、倭王権の政治秩序に包摂されることの是非が議論の対象となってきた。ここでは、朝鮮半島南部出土の倭鏡を評価するうえで必要となる、倭王権の社会統合と秩序の実態という視点から、鏡を媒介とした関係を検討するにしたい。

質と量による序列化 古墳時代には、倭王権が三国西晋鏡や倭鏡など、大小の鏡を分与した。倭鏡は、面径と数量による序列をより細かく表現する装置として、王権が考案・創出した器物である[下垣 2011・2018]。大小の鏡を作り分け、多面副葬が普遍的である状況は、質と量の違いによる格差表現がなされていたものと理解されている。前期中葉以降には倭鏡を優位とした中国鏡（漢鏡・

三国西晋鏡)と倭鏡で構成する序列がみえており〔下垣2011〕,中期後葉以後には中国鏡(南北朝鏡)を上位に置いた中国鏡と倭鏡で構成する序列がみえている〔上野2004,下垣2011,辻田2012b・2018〕。分与主体である倭王権が保有した鏡の状況にあわせて,面径を指標とした序列が時期ごとに存在した。

価値の認識プロセス 日本列島における鏡の検討は,保有した鏡の比較にその主眼が置かれている。型式編年をはじめとする生産への注目も,こうした分与=流通=社会統合という使用(消費)の分析を前提とした性格が強い〔辻田2007,下垣2011〕。

副葬から抽出した保有という現象は,ある時間相における静態であり,器物の保有を通じた序列はそれを比較したものに過ぎない。価値を認識するプロセスに言及することは僅少である〔辻田2007・2018,下垣2011・2017・2018,上野2018〕。鏡は中国鏡も倭鏡も,中国との政治交渉を反映するという入手経緯や模倣背景がその存在意義を不問にしており,器物に自明の価値を付与している。保有から抽出した序列や格差に,分与主体の意図をよみとくことはできても,受領者がその価値を如何に認識したかという視点は置き去りのままである。鏡を媒介とした秩序は想定しえても,その運用の実態はみえにくい。日本列島内部の鏡の場合は,共有を前提とする範囲での議論であるため,価値の認識が問われることがないまま,秩序の実態解明は進むことになる。

しかし,器物の保有を比較する我々は,ある時間相に存在した器物を集積して俯瞰しているのであり,我々が認識している価値を同時代において認知しえたのか,を問わねばならない。器物による序列は汎日本列島規模で有効性をもつ絶対指標として認識しているが,各地の受領者がその指標を知覚・認知すべき機会は存在したのだろうか。新たに器物の分与を受ける場合には,器物に初めて接することになり,授与を通じて器物の特殊性・貴重性は認知しえても,受領する器物の価値・序列を認知することは容易ではない。後世の集積的視点で俯瞰して復元した秩序が,同時代において受領者に遍く共有されているのか,問わねばならない。

比較の場の保証 では,比較の基準はどのようにして共有されたのであろうか。参向型と下向型という分与形態からみてみよう〔川西2004,下垣2011・2017・2018,辻田2018〕。それは,価値を認識するプロセスに注目した取り組みであり,分与の場を分与主体側に求めるか受領者側に求めるかを区分したものである。価値の認識には比較が必要なため,個別に分与される下向型では価値を相対化する場を欠き,参向型を積極的に評価する傾向は強い。倭鏡では生産の解明が進み,王権中枢での集中生産が指摘されることと相まって,分与も生産を主導した倭王権に一元管理されたとする理解が多い。生産の一元管理は,王権による直接分与を連想させ,参向型の理解をより強調することになる。

しかし,それは比較が授受の場に限定されることを意識した理解でもある。器物を比較する場は,授受の機会に限定されるものではない。古代以後の衣冠,あるいは古墳時代の甲冑や馬具は,分与者と受領者との関係を表現する装置であるとともに,着装者(受領者)の序列を自他に認識させる装置でもある。甲冑(武装)や馬具(馬装)の序列(比較基準)を認識していなくても,その着装者が複数存在する場において,器物にあらわれた異同を認識することは可能である。着装する器物であるがゆえに,授受の場以外でも,分与者が受領者に対し付与した序列は可視化できるのである。それは,器物の価値が授受の場に限定されることなく,使用の場においても認識されることを示し

ている(図5)。

鏡はどうであろうか。鏡は保有する器物であり、使用の場はかなり限定される。価値を認識する比較の場は、ほぼ授受の場に限定されることになる。比較の場こそ価値の認識を保証する前提であり、着装器物(実用)か保有器物(非実用)の違いは、比較の場に違いを生じる。保有器物であり、授受の場に比較が限定されることこそ、鏡の価値をめぐる理解を規定しているのである。間接分与(二次流通)を想定すれば、比較基準は相対的なものとなり、分与主体が意図した秩序をすべての保有に貫徹させることは難しい。下向型の理解も同じで、個別の授受では「授受」の意義(保有の意義)は認識できても、序列を認識することはできない。複数の受領者を対象とした分与では比較も可能だが、間接分与(二次流通)と同じく、相対的な比較しか果たせないため、積極的には支持されない傾向がある。鏡の授受形態に参向型が強調され、王権=分与主体からの直接入手が強く意識される所以である。

分与の再生産 では、価値の認識と比較の場との関係を、鏡の保有の状況から今少し検討してみよう。古墳では、複数面を副葬する事例が数多く存在している。近似した大きさの鏡を複数面副葬する事例もあるが、大小の鏡を交えて複数の鏡を副葬することも多い。前期では群馬県前橋天神山古墳、福井県花野谷1号墳あるいは神奈川県真土大塚山古墳などが挙げられる。中期にも、奈良県円照寺墓山1号墳や滋賀県新開1号墳などがあり、後期には大型鏡の保有が限定されるものの、熊本県国越古墳、群馬県綿貫観音山古墳、同観音塚古墳、千葉県金鈴塚古墳など面径の異なる諸鏡を組み合わせた副葬事例はみえる。各期の様相は一様ではないが、前期から後期を通して、形態の異なる鏡を保有する現象が継続したことを示している。中国鏡と倭鏡の区別はなく、両者をあわせて形態の違う鏡を取り揃えたのである。

面径は、鏡の序列を表している。倭鏡生産において大きさを反映して鏡式を作り分けるのは、分与で序列を表現することを目的にしたものである[上野2004, 辻田2007・2018, 下垣2011・2018]。鏡の面径が保有者の序列を示現するのであれば、副葬鏡は同形態の鏡で構成されるはずである。ところが、副葬=保有=使用の場において、大小の鏡が組合うことは、異なる序列が特定の被葬者に重複していることを示す。後期には、一つの埋葬施設に面径の異なる鏡が共伴するが、帰属する被葬者は異なっており、面径の違いが保有者の違いを反映している。古墳に埋葬された有力首長の間では、序列に対応した面径の鏡を「分有」する状況がみえるのである。前期や中期には、面径の異なる鏡を一人の被葬者が保有する例があるが、それは地域社会における「分有」の可能性を保証する鏡を保有した結果ではなかったか。平易に表現すれば、鏡は受領者である有力首長個人を序列づけるための手段だけではなく、鏡の受領者が新たな分与の主体となる可能性を含んでいるのである。

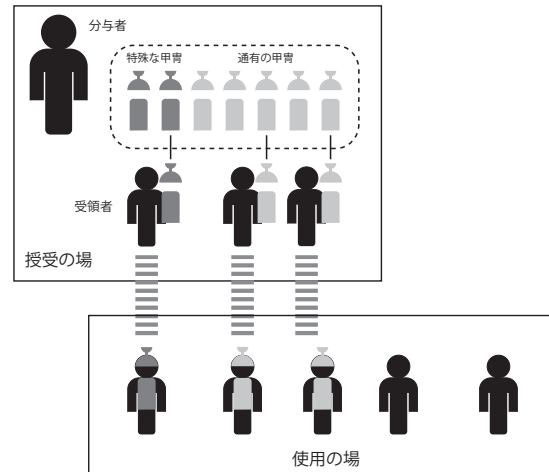


図5 甲冑(着装具)の分与と価値の認識

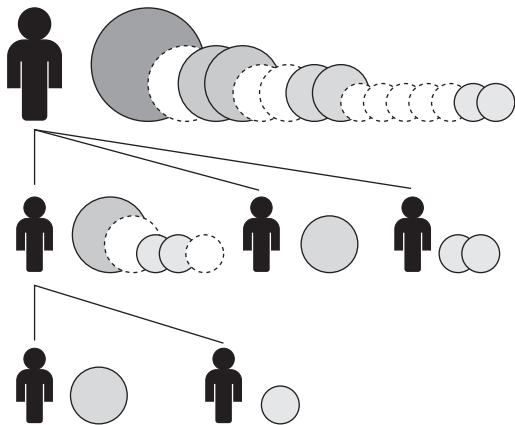


図6 鏡の分与と価値の認識

形態の異なる鏡を保有することは、古墳時代を通じて比較的普遍的にみられ、それは再分与(二次流通)を含みこんだ分与構造があることを示している[辻田 2007, 下垣 2011]。比較の場は「分有」という形を取る限り保障されるのであり、製作・入手という特定の時間相に限定せずとも、保有を継続した宝器の分与も存在しうるのである(図6)。

倭王権が意図した秩序 中国鏡を分与するにせよ、倭鏡を分与するにせよ、倭王権は、鏡を媒介とした関係・秩序の構築と更新を意図した。分与の再生産を織り込んで、倭王権からの鏡の分与がなされたことを指摘したが、鏡の分与主

体である倭王権が意図した秩序とはいかなるものであったのだろうか。

複数の受領者を対象とした分与であれば比較が保証され、鏡の序列を認識することは可能である。個別の受領者を対象とした分与でも、倭王権が保有する器物との対照が可能であれば、比較の場は保証される。王権が保有する器物の分与という形を取れば、受領者が価値・序列を認識することは可能である。鏡が各地で分与される場合でも、「分有」という形を取る限りにおいて比較の場は常に保証される。それは、下向型の分与であっても、参考型の分与を受けた有力首長が各地に戻り再分与を行う場合であっても、同じであり区分の要はない。二次流通を内包した分与が存在することは、分与の再生産により秩序の範囲と密度を拡充することを期待したものであり、末端の保有まで統制を意図しない緩やかな秩序のありかたがみえる。

二次流通は比較基準が相対化され、鏡が体現する秩序を多元化させるものとして、積極的に評価されない。しかし、直接分与により秩序を体現するという思考そのものが、相対化されねばならないのではないだろうか。倭王権が分与した器物において、鏡ほど形態差が明確でより細かな序列を見いだせる器物はない。それゆえ、より階層的な秩序を想定することになり、古代国家の身分秩序に似た理解を生成することになる。

しかし、末端までの保有を統制することと、末端の流通まで器物の価値・序列が貫徹することとは同義ではない。受領者は分与された鏡をもとに、さらなる分与を展開することが可能であった。秩序構築が可能な存在、あるいは王権が秩序構築を期待する存在には、相応の質と量の鏡が分与されたのである。王権からの分与は、各地での秩序構築に柔軟に対応しうるシステムであった。二次流通を経て、受領者が倭王権の意図する序列を認知せずとも、鏡に付与された序列化の機能は作用したのである。授受に関与しない第三者であっても、鏡の序列・秩序に理解があり、保有鏡を視認する機会があれば、鏡に付与された倭王権の序列を認識することを可能にするからである。分与を直接管理せずとも、器物の論理は貫徹することになる。

倭王権からの直接分与に限定しない、個別授受をふくめた比較・序列の集大成こそ、倭王権が鏡の分与を媒介として意図した秩序であり、我々が集積した視点で俯瞰する秩序でもある。しかし、

その実態＝完成形を倭王権は意識したわけではなく、ある程度の青写真は想定して分与を展開するものの、細部は現場次第という性格の、緩やかな秩序構築の戦略であったと理解するのである。

朝鮮半島南部の倭鏡 倭王権を起点とした鏡の分与が二次分与を含み込み、末端の保有まで管理統制する対象ではないという理解にたち、朝鮮半島南部の倭鏡の入手経緯を検討してみよう。

直接分与を前提としなくても、倭王権が鏡の分与を通じた秩序は体现しうるので、朝鮮半島南部で倭鏡を保有する被葬者がすべて倭王権膝下に参向して鏡を入手したと考える要はない。参向型で入手した鏡を九州の有力首長が分与したのか、下向型で九州の有力首長が入手した鏡が分与されたのか、下向型で九州の首長と三国社会の被葬者を対象として、両者が同席するなかで鏡が分与されたのか、いずれかを想定することになる〔上野 2004, 下垣 2011, 辻田 2015b・2018〕。他の倭系文物とともに現地へもたらされたものとする理解である。倭韓交渉、具体的には実務を担う北部九州の有力者と交渉した在地の有力者が、北部九州の有力者より鏡を入手したのが実態ではないかと推測する。

朝鮮半島南部出土鏡で問題とされるもう一つの点、鏡が寡少な三国社会での意義について、価値の認識プロセスという視点で考えてみよう。倭の論理に包摂されること、鏡を媒介とした秩序に連なることに対して異論はある。器物が体现する秩序は、誰が認識するものであるのか、という視点から考えてみたい。

分与者と受領者の関係に限定すれば、分与者の意図は、受領者が器物の価値・序列を認識することで現実化する。しかし、分与者・受領者以外の他者が器物の価値・序列を認識することでも、分与者が受領者に与えた評価・序列は具現する。帯金式甲冑など着装する器物にはよりその性格がより鮮明になる(図5)。受領者は受領した帯金式甲冑の価値・序列を認識していなくとも、それを着装＝使用することによって、分与者が意図した序列・評価を他者は認識することができる。被葬者の出自が倭になくとも、倭の政治秩序に包摂されなくとも、倭系集団が活動する場において着装すれば、その序列—倭王権が被葬者に向けた評価—は認識される。全南の鏡副葬古墳では、規模の小さい古墳に、特異な帯金式甲冑を保有していたことは、器物が分与者と受領者の関係だけで完結するのではなく、分与者である倭王権の評価を渡海した倭系集団に認識させる機能も期待されたのであろう。第2期の全南地域の倭鏡も同じ性格をもち、保有する器物を通じて、倭王権の秩序における保有者の位相を、渡海した倭系集団に認識させる意義も有したものと考えられる。重層的な分有ネットワークが体系化したものこそ、鏡を媒介とした秩序の実態であり、その秩序における位相を分与者と受領者以外の第三者に認識させることにも保有の意義があったと指摘したい。一つの器物に分与者の認識と受領者の認識を同調させようとすることも、相対化されるべき視点ではないだろう。

朝鮮半島南部出土の倭鏡は、鏡を媒介とした政治関係の理解に、絶対基準を強く意識しすぎるところに問題があること、かつ受領者と分与者の相互承認的な意味合いを強調しすぎるところにも問題があることを指摘するものであった。この2点にこそ、象徴的器物を媒介とした社会関係を検討する視点の偏りが象徴されているといえよう。

⑤……………鏡を介した倭の対韓交渉

これまで、朝鮮半島南部出土鏡について、中国鏡と倭鏡の流入プロセスについて、それぞれ検討

を進めてきた。中国鏡は、中国と日本列島を流入元の候補地に挙げうるが、保有状況は日本列島と類似することを指摘した。ただ、保有状況から流入元を規定すると、倭の中国鏡入手と論理的に整合しない可能性があることを第2期の三国西晋鏡で指摘し、倭韓が交渉先を共有し、交渉手段を共有する中で生じた分有の結果としての可能性を推測した。日本列島で保有した中国鏡(三国西晋鏡・南北朝鏡)のすべてが朝鮮半島南部を中継したと考える要もなく、朝鮮半島南部の中国鏡(三国西晋鏡・南北朝鏡)のすべてを日本列島との関係で考える要もないことを指摘した。倭鏡は、日本列島からの流入が確実であるが、分与主体の倭王権からの直接分与か、その分与を受けた受領者を介した間接分与であるかを、価値の認識という視点で整理した。価値の認識は、つまるところ比較の場の保証であり、面径=序列の異なる鏡を保有するありかたは、受領者を起点とした二次分与を想定するものであり、倭王権がすべての分与を統制・管理することを意図しておらず、鏡を媒介とした秩序は各地での秩序構築を受けて拡充してゆく可能性を内包するものであることを指摘した。その視点で朝鮮半島南部出土鏡を評価すれば、北部九州の有力首長を介した入手が想定できること、鏡には倭王権が意図した序列が反映されているものの、鏡の保有が倭王権の政治秩序への帰属を強制する性格を帯びないことを指摘した。これらを踏まえて、改めて鏡を介した倭の対韓交渉の様相を各時期別に素描して検討を終えることにしたい。

第1期：4世紀 鏡の保有が、慶南東部と慶北東部にほぼ限定されていることに特徴がある。倭鏡は倭との関係を確実に示すものであり、二次分与も含めた鏡の分与が朝鮮半島南部にも及んだことを示している。いずれも小型鏡であり、北部九州の首長を介した流入であった可能性が高い。慶南東部では、弥生時代後期以来の遺制を受けた北部九州の破鏡・鏡片が出土しており、同地との関係を介して鏡が流入したことを想定させる。三国西晋鏡は、必ずしも倭との関係を反映するものではないが、大成洞古墳群では倭系文物だけでなく、中国系文物とも共伴することは、対中国(対楽浪・帯方故地)との交渉が倭と共有する一面もあることを示唆するものとして受け止められる。

この時期は、倭の対外交渉が、楽浪から金官加耶へと変動すること、その変動に際して倭王権が対外交渉に直接関与を深めることが、多々指摘されている[福永1998, 田中2007, 岸本2010]。この時期は、第1期倭鏡の生産が展開する時期であり、数多くの大型倭鏡が生産される時期でもある[森下1991・2002, 下垣2003ab・2011・2018]。倭製三角縁神獸鏡や方格規矩四神鏡系倭鏡など大型倭鏡の分与と副葬がみえる時期である。しかし、朝鮮半島南部の倭鏡が小型鏡に限られることは、鏡の流入にみえる倭韓の交渉は低調であり、王権中枢からの直接関与を想定しうるものではなかった。破鏡の保有は、倭韓の交渉における北部九州の関与が小さくないことを物語り、王権の関与と対照をなすものでもある。

第2期：5世紀前中葉 全南地域と慶北東部が鏡保有の核となる。古墳時代倭鏡が不在で、中国鏡のみを保有するのがこの時期の特徴である。ともに鉄鏡を含むことは、中国での鏡保有を反映するものである。

全南地域と慶北東部では保有する鏡種は同じであるが、倭系文物の共伴状況が全く異なり、慶北の鏡は高句麗を介した流入を想定し、全南の鏡は倭を介した流入を想定する。

全南の鏡は、対中国(対楽浪・帯方故地)との交渉が倭との関係を反映するものとして受け止められる。この場合、第1期の慶南東部と異なり、鏡保有古墳の被葬者は中国系文物を保有せず、主

体的な対中国交渉をおこなっていない。その点において、倭が主導する対中国交渉に参画した、それを支援する立場を象徴している。倭鏡を欠いていることや、小型鏡に限られていることは、この時期も鏡を媒介とした関係性の構築は低調であった、相対的に評価の低いものであったといえよう。ただ、雁洞古墳では、冠帽や飾履など百済の装身具を保有しており、外来要素が倭系だけではないことは、ペノルリ古墳や野幕古墳と様相を異にしている。倭と百済から連携を希求された存在であったのだろう。

模倣双頭龍紋をはじめとするこの時期の三国西晋鏡を、同期の対外交渉の過程で入手したとの理解に立てば、山口県赤妻古墳、福岡県谷口古墳、兵庫県茶すり山古墳、岡山県随庵古墳、福井県向山1号墳など、同種の鏡を前後して保有した存在も、対外交渉に携わるなかで共有された鏡として改めて統合的に解釈することが可能になる(図4)。

忠南が保有した弥生時代倭鏡は、慶南東部の大成洞14号墳出土の鏡片・破鏡と同じ性格をもつものと理解する。弥生時代倭鏡も奈良県池殿奥4号墳出土鏡のように古墳時代に副葬＝保有される事例があり、破鏡・鏡片が古墳時代にも九州北部を中心に生成・保有されていたのと同じ背景をみることができよう[辻田2005・2007b]。破鏡・鏡片や弥生時代倭鏡は九州北部勢力を介して流通しており、当地での保有もその活動を反映するものとして理解できよう。慶南東部と忠南の九州北部系の鏡の保有は、この時期の倭韓交渉が全南にみる倭王権との関係を想定できるものがある一方で、前代来の九州北部を介した面も反映しているのである。

第3期：5世紀後葉～6世紀 朝鮮半島南部でひろく鏡を保有した時期である。中国鏡は、倭韓が交渉先を共有し、交渉手段を共有する中で生じた分有の結果としての可能性を推測した。倭も百済も中国南朝から南北朝鏡を入手したのであり、交渉の重なりが鏡を分有する状況をみせたのである。この視点を考える上で示唆的なのが、武寧王陵出土鏡と斗洛里32号墳出土鏡の同型鏡の日本列島での様相である。

武寧王陵出土の浮彫式獸帯鏡は、群馬県綿貫観音山古墳と滋賀県三上山下古墳で同型鏡が出土している。いずれも6世紀中葉以降の古墳での副葬事例であり、現状では武寧王陵での副葬を初出とすることに特徴がある。一方斗洛里32号墳と関連する浮彫式獸帯鏡は、奈良県藤ノ木古墳、三重県木下古墳、熊本県国越古墳、同江田船山古墳、福岡県沖ノ島21号遺跡などで同型鏡が出土している。古墳の詳細が判明しているものでは、江田船山古墳がやや時期をさかのぼるが6世紀の古墳での副葬が多い。同型鏡群を倭が入手する時期は、5世紀の南朝宋への遣使時期に限るため、これらをすべて倭王権からの分与とすれば、5世紀後葉から6世紀前半まで保有を継続したことになる。もし、6世紀に南朝梁と百済の通交を通じて入手したととらえれば、副葬時期と入手時期の隔たりは解消されることになる。

6世紀以後に分有がみえる同型鏡の一群は、百済を介して入手した可能性があることも指摘しておきたい[上野2015a]。すべての同型鏡を中国南朝から倭への直接交渉で理解する要はなく、すべての同型鏡を中国南朝から百済を経由させて倭にいたる経路で理解する必要もないのではないかと。両者が併存していた可能性も考えておきたい。

倭鏡では、全南と慶南西部で中型鏡と小型鏡を保有し、慶南東部と慶北東部は小型鏡を保有している。南北朝鏡の副葬が本格化するTK23型式期以降は、南北朝鏡や旋回式獸像鏡、乳脚紋鏡、珠

紋鏡など第3期倭鏡との副葬事例が多くなる。この時期には、南北朝鏡（大型—中型）—中型倭鏡—小型倭鏡という鏡の序列が形成される〔上野2004, 下垣2011, 辻田2012b・2018〕。こうした序列に照らせば、中型鏡を保有する慶南西部と全南と、中型鏡を欠き小型鏡Aすら欠いた慶南東部と慶北東部は対照的である。この西高東低のあり方は、直接分与・間接分与という分与形態の違いを措いても、鏡の分与を通じた倭韓の関係が西方を重視する形で進行したことを示している。鏡の保有者には、山清生草9号墳をはじめ倭人系の人物を少なからず含むことも、この時期の特徴である。

忠南と全北が倭鏡を保有していないことも象徴的である。これらの地域が南北朝鏡のみを保有し、倭鏡を欠くことは、倭の鏡の秩序では中型鏡や小型鏡を欠いた構成である。倭王権からの分与は、秩序の再構築を可能にする二次分与を内包するものであり、大小を交えた鏡で構成することが多い。忠南・全北の鏡は大型鏡や中型鏡Aのみで構成されることになり、倭の東西両極に大小さまざまな鏡が分与される状況とは一線を画することになる〔上野2004, 下垣2011, 辻田2018〕。こうしたことも、同地の南北朝鏡を南朝から入手したとの想定を支援する。

なお、この時期に鏡を副葬した古墳には、武寧王陵や慶北高霊池山洞45号墳や、慶北慶州金鈴塚のように、各地の王権中枢の構成員の墓から出土する例を含むことを一つの特徴としている。それは、対外交渉の管理がより集約されつつあることを反映するものでもあろう。

おわりに

朝鮮半島南部出土鏡について、鏡の系譜を整理し、中国での鏡の保有状況と日本列島での鏡の保有状況を対照して、中国鏡と倭鏡の流入プロセスを検討した。

中国鏡は日本列島での保有状況に非常に近い様相を示すものの、すべてを倭から流入したとは考えず、倭韓が対中国交渉を共有した結果として、相互に関係をもちつつも次元の独立した交渉の結果として理解することを提案した。第3期の南北朝鏡も同じ背景で理解でき、同型鏡の一部は百済を介して入手した可能性を示した。

倭鏡は、日本列島からの流入が確かではあるが、王権からの直接分与か二次流通を介した間接分与であるのかを、価値の認識という視点で検討した。間接分与であっても、王権が鏡の分与に企図した秩序・序列は機能すること、日本列島内部においても分与の再生産を保証する保有のありかたがみえることから、直接分与に限定しないより柔軟な、拡大の可能性を内在させた秩序体系であることを示した。その視点に照らせば、朝鮮半島南部の倭鏡は北部九州を介した間接分与を想定できることを指摘した。

倭王権が意図した秩序・序列は、直接関与を前提とするのではなく、また末端まで保有を管理するものではなかった。加えて、価値の認識は、分与者と受領者との関係に限定するのではなく、第三者の認識をも可能にする装置としての意義も考える必要があり、朝鮮半島南部の帯金式甲冑や鏡にはそうした機能が期待されたことを示した。

朝鮮半島南部の鏡は、倭韓交渉を具現するだけでなく、それを政治関係の構築に利用した倭王権の意図・秩序を検討し復元してゆく上でも有益な視点を提供するのである。

註

(1)——ここでは、朝鮮半島南部の出土鏡を集成した情報に基づいて、整理を進めてゆきたい〔上野 2004, 李陽洙 2009〕。以下本文で詳述する内容は、これらの文献に基づいている。こうした集成に反映されていない情報や、個別に報告書の記載を引用する際には、引用文献を示した。

(2)——鏡片形態の鏡は、漢魏の周辺に存在した鮮卑墓などでも出土している。研磨・穿孔を施すこと、大型鏡を鏡片化することにおいて、大成洞古墳群出土鏡片は弥生時代の破鏡との関係は強い。

(3)——倭鏡の分類は、倭鏡を体系的に捉えた森下章司や下垣仁志の分類に従う〔森下 1991・2002, 下垣 2003ab・2011〕。主題を系列として区分し、「某鏡系倭鏡」という名称を用いているが、「某鏡系倭鏡」という名称は煩雑であり、「系倭鏡」は省いて表現する。

(4)——『双頭龍紋鏡の生産は、後漢後半の2世紀から西晋期の3世紀まで継続することが指摘され、3型式に分類されている〔西村 1983〕。龍紋を細線で表現するⅢ式は、魏晋期以降の出土しか見えておらず、確実に後漢にまで遡る事例を欠くため、後漢の双頭龍紋鏡と区分した、創作模倣を特徴とした三国西晋鏡の双頭龍紋鏡として、「模倣双頭龍紋鏡」の名称を用いる。これは、漢代の方格規矩四神鏡とそれを模倣した魏晋の方格規矩鏡を区分して、模倣方格規矩鏡と呼ぶことと整合させたものでもある。

参考文献

(日本語)

- 東 潮 1990「四世紀の国際交流」『古墳時代の工芸』古代史復元7, 白石太一郎編, 講談社, pp.167-172.
- 東 潮 1992「対外交流」『図説・日本の人類遺跡』小野昭・春成秀爾・小田静夫編, pp.188-191.
- 上野祥史 2004「韓半島南部出土鏡について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集, 国立歴史民俗博物館, pp.403-433.
- 上野祥史 2007「3世紀の神獸鏡生産—画文帯神獸鏡と銘文帯神獸鏡—」『中国考古学』第7号, 日本中国考古学会, pp.189-216.
- 上野祥史 2009「古墳出土鏡の生産と流通」『季刊考古学』第106号, 雄山閣, pp.48-51. 上野祥史 2011a「青銅鏡の展開」『古墳時代への胎動』弥生時代の考古学 第4巻, 藤尾慎一郎・設楽博己・松木武彦編, 同成社, pp.139-154.
- 上野祥史 2011b「中国考古学からみた古墳時代」『季刊考古学』第117号, 雄山閣, pp.31-35.
- 上野祥史 2012a「帯金式甲冑と鏡の副葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第173集, pp.477-498.
- 上野祥史 2012b「金鈴塚古墳出土鏡と東国の古墳時代後期社会」『金鈴塚古墳研究』創刊号, 木更津市郷土博物館金のすず, pp.5-28.
- 上野祥史 2013a「祇園大塚山古墳の画文帯神獸鏡—同型鏡群と古墳時代中期—」『祇園大塚山古墳と5世紀という時代』上野祥史・国立歴史民俗博物館編, 六一書房, pp.107-134.
- 上野祥史 2013b「中国鏡」『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学 第4巻, 一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編, 同成社, pp.15-30.
- 上野祥史 2014「龍文透彫帯金具の受容と創出—新羅と倭の相互交渉—」『七観古墳の研究—1947年・1952年出土遺物の再検討—』阪口英毅編, 京都大学大学院文学研究科, pp.279-294.
- 上野祥史 2015a「中期古墳と鏡」『中期古墳とその時代—5世紀の倭王権を考える—』広瀬和雄編, 雄山閣, pp.89-98.
- 上野祥史 2015b「鏡からみた卑弥呼の支配」『卑弥呼—女王創出の現象学—』大阪府立弥生文化博物館, pp.132-141.
- 上野祥史 2015c「楽浪郡と韓と倭」『狗邪国と古代東アジア』仁済大学校加耶文化研究所・金海市, pp.47-100.
- 上野祥史・高田貫太編 2016『古代日韓交渉の実態』歴博国際シンポジウム予稿集
- 上野祥史 2018「古墳時代における鏡の分配と保有」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集, pp.79-110.
- 岡村秀典 2011「東アジア情勢と古墳文化」『古墳時代 上巻』講座日本の考古学第7巻, p.521-551.
- 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁茂子 1965『総社市 隋庵古墳』総社市教育委員会
- 川西宏幸 1988『古墳時代政治史序説』塙書房
- 川西宏幸 2004『同型鏡とワカタケル—古墳時代国家論の再構築—』同成社
- 岸本直文 2010「倭国の形成と前方後円墳の共有」『史跡で読む日本の歴史』2 古墳時代, 吉川弘文館, pp.14-46.
- 岸本直文 2013「三角縁神獸鏡と前期古墳」『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学 第4巻, 一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編, 同成社, pp.31-42.

- 車崎正彦 2002a「三国鏡・三角縁神獸鏡」『考古学資料大観』第5巻, pp.181-188.
- 車崎正彦 2002b「六朝鏡」『考古学資料大観』第5巻, pp.201-204.
- 車崎正彦 2008「三角縁神獸鏡の年代と古墳出現の年代」『史観』第一五九冊, 早稲田大学史学会編, pp.92-112.
- 小林行雄 1966「倭の五王の時代」『日本書紀研究』第二冊, pp.131-162.
- 近藤喬一 2003「三国両晋の墓制と鏡」『アジアの歴史と文化』第七輯
- 下垣仁志 2003a「古墳時代前期倭製鏡の編年」『古文化談叢』第49集, 九州古文化研究会, pp.19-50.
- 下垣仁志 2003b「古墳時代前期倭製鏡の流通」『古文化談叢』第50集(上), 九州古文化研究会, pp.7-36.
- 下垣仁志 2005「倭王権と文物・祭式の流通」『国家形成の比較研究』前川和也・岡村秀典編, 学生社, pp.76-98.
- 下垣仁志 2011「古墳時代王権構造の研究」吉川弘文館
- 下垣仁志 2012「古墳時代首長墓系譜論の系譜」『考古学研究』第59巻第2号, 考古学研究会, pp.56-70.
- 下垣仁志 2012「銅鏡授受の意義」『考古学ジャーナル』No.635, ニューサイエンス社, pp.10-14.
- 下垣仁志 2013「鏡の保有と「首長墓系譜」」『立命館大学考古学論集』VI, 和田晴吾先生定年退職記念論集, pp.189-202.
- 下垣仁志 2018『古墳時代の国家形成』吉川弘文館
- 高松雅文 2011「三重県の鏡(1)―同型鏡群―」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第20号, pp.51-64.
- 高久健二 2000「考古学から見た弁・辰韓と倭」『九州考古学会・嶺南考古学会第4回合同大会』pp.25-81.
- 高久健二 2002「楽浪郡と倭」『韓半島考古学論叢』西谷正編, pp.259-280.
- 高田貫太 2014「古墳時代の日朝関係―新羅・百濟・大加耶と倭の交渉史―」吉川弘文館
- 田中晋作 2010『筒形銅器と政権交替』学生社
- 辻田淳一郎 2005「破鏡の伝世と副葬―穿孔事例の観察から―」『史淵』九州大学大学院人文科学研究院, 第142輯, pp.1-39.
- 辻田淳一郎 2006「威信財システムの成立・変容とアイデンティティ」『東アジア古代国家論―プロセス・モデル・アイデンティティ―』田中良之・川本芳昭編, pp.31-64.
- 辻田淳一郎 2007a「古墳時代前期における鏡の副葬と伝世の論理―北部九州地域を対象として―」『史淵』第144輯, 九州大学大学院文学研究院, pp.1-33.
- 辻田淳一郎 2007b「鏡と初期ヤマト政権」すいれん舎
- 辻田淳一郎 2012a「鏡」『古墳時代研究の現状と課題(下)―社会・政治構造及び生産流通研究―』土生田純之・亀田修一編, 同成社, pp.151-174.
- 辻田淳一郎 2012b「倭製鏡と中国鏡―モデルとその選択―」『考古学ジャーナル』No.635, ニューサイエンス社, pp.15-19.
- 辻田淳一郎 2012c「九州出土の中国鏡と対外交渉―同型鏡群を中心に―」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第15回九州前方後円墳研究会北九州大会資料集, pp.75-88.
- 辻田淳一郎 2012d「雄略朝から磐井の乱に至る諸変動」『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会 研究発表資料集』日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会, 高倉洋彰・三阪一徳編, pp.489-498.
- 辻田淳一郎 2013「古墳時代中期における同型鏡群の系譜と製作技術」『史淵』第150輯, 九州大学大学院人文科学研究院, pp.55-93.
- 辻田淳一郎 2014a「建武五年銘画文帯神獸鏡の文様と製作技術」『東アジア古文化論叢』上巻, 高倉洋彰編, 高倉洋彰先生退職記念論集刊行会, pp.177-196.
- 辻田淳一郎 2014b「鏡からみた古墳時代の地域間関係とその変遷―九州出土資料を中心として―」『古墳時代の地域間交流』2, 第17回九州前方後円墳研究会 大分大会発表資料・要旨集, pp.1-26.
- 辻田淳一郎 2015a「同型鏡群の鈕孔製作技術―画文帯環状乳神獸鏡Aを中心に―」『史淵』第152輯, 九州大学大学院人文科学研究院, pp.31-50.
- 辻田淳一郎 2015b「古墳時代中・後期における同型鏡群の授受とその意義―山の神古墳出土鏡群の位置づけをめぐる―」『山の神古墳の研究―「雄略朝」前後における地域社会と人制に関する考古学的研究: 北部九州を中心に―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室(科学研究費 基盤研究(B) 成果報告書), pp.248-262.
- 辻田淳一郎 2018『同型鏡と倭の五王の時代』同成社
- 奈良県立橿原考古学研究所 『三次元デジタル・アーカイブを活用した古鏡の総合的研究』
- 西村俊範 1983「双頭龍文鏡(位至三公鏡)の系譜」『史林』第66巻第1号, 史学研究会, pp.95-115.
- 仁藤敦史 2004「文献よりみた古代の日朝関係―質・婚姻・進調―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集
- 兵庫県教育委員会編 2010『史跡 茶すり山古墳』兵庫県文化財調査報告第383冊
- 福永伸哉 1998「対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格」『青丘学術論叢』30

- 福永伸哉 2005a『三角縁神獸鏡の研究』大阪大学出版会
- 福永伸哉 2005b「いわゆる継体期における威信財変化とその意義」『井の内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古研究報告第3冊，大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団編，pp.515-524.
- 福永伸哉 2007「継体王朝と韓半島の前方後円墳—勝福寺古墳築造期の時代背景をめぐって—」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第4冊，寺前直人・福永伸哉編，pp.425-434.
- 朴天秀 2004「大加耶と倭」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集
- 朴天秀 2007『加耶と倭—韓半島と日本列島の考古学—』講談社
- 松浦宥一郎 1994「日本出土の方格 T 字文鏡」『東京国立博物館紀要』第29号，pp.177-254.
- 森下章司 1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第76巻第4号，史学研究会，pp.1-43.
- 森下章司 1998「古墳時代前期の年代試論」『古代』105号，早稲田大学考古学会，pp.1-28.
- 森下章司 2002「古墳時代倭鏡」『弥生時代・古墳時代 鏡』考古学資料大観 第5巻 小学館，pp.305-316.
- 森下章司 2005「器物の生産・授受・保有形態と王権」『国家形成の比較研究』前川和也・岡村秀典編，学生社，pp.179-194.
- 森下章司 2011「鏡」『古墳時代 下巻』講座日本の考古学第8巻，広瀬和雄・和田晴吾編，pp.454-477.
- 山尾幸久 1989『古代の日朝関係』塙書房
- 山本孝文 2018『古代韓半島と倭国』中央公論社
(韓国語)
- 慶星大学校博物館 2000『金海大成洞古墳群 I』慶星大学校博物館研究叢書第4輯
- 国立文化財研究所 2005『日本東京国立博物館所蔵 小倉コレクション 韓国文化財』海外所在文化財調査書第12冊
- 国立羅州文化財研究所 2014『高興野幕古墳 発掘調査報告書』
- 全南大学校博物館・(財) 湖南文化財研究院・文化財庁・高興郡 2015『高興古頭里雁洞古墳』全南大学校博物館学術叢書100
- 全北大学校博物館・南原市 2015『南原西谷里と斗洛里 32号墳』
- 大成洞古墳群博物館 2015『金海大成洞古墳群—70号墳主椁・95号墳—』博物館学術叢書第16冊
- 東義大学校博物館 2000『金海良洞里古墳文化』東義大学校博物館学術叢書7
- 東新大学校文化博物館 2014『海南萬義塚1号墳』
- 東新大学校文化博物館 2015『新安 安佐面 入洞・ペノルリ古墳群』
- 福泉博物館 2009『神の鏡—銅鏡—』
- 李陽洙 2009「韓半島出土銅鏡研究の現況」『神の鏡—銅鏡—』福泉博物館
(中国語)
- 吉林省文物考古研究所・集安市博物館編 2004『集安高句麗王陵—1990～2003年集安高句麗王陵調査報告書』文物出版社
- 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所 2004「遼寧北票喇嘛洞墓地 1998年発掘報告」『考古学報』2004年第2期
- 遼寧省博物館編 2015『北燕馮素弗墓』文物出版社
- 南京市博物館・南京市江寧区博物館 2008「南京江寧谷里晋墓発掘簡報」『文物』2008年第3期
- 全 洪 1994「試論東漢魏晋南北朝時期的鉄鏡」『考古』1994年第12期

図出典

- 図1：筆者作成
- 図2 1：[南京市博物館 2008：図10] より筆者製図 2：奈良県立橿原考古学研究所提供
3：[福泉博物館 2009：p.209]
- 図3：筆者作成
- 図4 1：熊本博物館所蔵 / 筆者撮影 2：[鎌木ほか 1965：p.9 挿図6]
3：[兵庫県教育委員会編 2010：本文編 p.181 第132図]
- 図5：筆者作成
- 図6：筆者作成

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2018年5月24日受付，2018年10月1日審査終了)

Mirrors of the Southern Korean Peninsula and Negotiations between Wa (Japan) and Korea

UENO Yoshifumi

Political relationships mediated by objects tend to be described from the perspective of the giver. These relationships develop from the sense that the value of an object is self-evident, and the distributor and the recipient should recognize the value of the objects and the process of acquiring the objects. The mirrors unearthed in the southern region of the Korean Peninsula are a suitable material to highlight the issue.

In this paper, I analyzed the acquisition of mirrors during the Three Kingdoms period, which occurred in parallel with the Tumulus (Kofun) period, based on evidence from the mirrors owned in the southern Korean Peninsula. I tried to describe the structure that the Wa (Japan) Kingdom attempted to establish through the distribution of mirrors and the actual conditions of the negotiations between Wa and Korea.

First, I outlined the description concerning the mirrors excavated in the southern Korean Peninsula. I also examined the process of the inflows of the Chinese mirrors and the Wa mirrors by comparing ownership statistics regarding the mirrors in China and the Japanese archipelago. I suggested that the inflow of Chinese mirrors should be understood as a result of negotiations by Wa and Korea with China, which were conducted independently despite their shared relationships with China. I examined whether Wa mirrors were distributed directly by the Kingdom or indirectly through a secondary distribution from the perspective of the recognition of the values. I showed that the order the Kingdom intended to establish would function even if the mirrors were distributed indirectly, and the order the Kingdom intended to establish was one that was flexible without limiting their direct distributions and had a potential to expand since their indirect distributions are found in the Japanese archipelago. I pointed out that it is possible to assume that the Wa mirrors found in the southern Korean Peninsula were a secondary distribution that arrived via northern Kyushu.

I explained in detail the negotiations between Wa and Korea, revealing that the order enforced through mirrors would overemphasize the significance of the mutual agreement between the distributors and the recipients. Additionally, I showed that it is necessary to consider the significance of a device that would enable a third party to have the recognition, and that such a function was expected for metal-strap armors and mirrors in the southern Korean Peninsula.

Key words: Southern Korean Peninsula, mirrors, Chinese mirrors, Wa mirrors, the recognition of the values, the circumstances of the inflows